ベンチャー　～ＣＨＩＬＤＥＲＥＮ’Ｓ ＳＵＭＭＥＲ ＷＡＲＧＡＭＥ(ぼくらのサマーウォーケ

ひょろ助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
デジモンアドベンチャー　～ＣＨＩＬＤＥＲＥＮ，Ｓ　ＳＵＭＭＥＲ　ＷＡＲＧＡＭＥ（ぼくらのサマーウォーゲーム）～

【Ｎコード】
Ｎ５５０２Ｋ

【作者名】
ひょろ助

【あらすじ】
ある夏の暑い日。高校２年生になった太一は母親と妹・ヒカリからバイトでもしろといわれ、学校にいる光子郎にアドバイスを求め訪ねにいく。
だが、そこには学校のアイドル篠原夏希がいて、太一にバイトをしてくれと言うのだ。
そしてそれは、太一の新たな冒険の始まりを告げていた。

プロローグ（前書き）

初めまして、ひょろ助です。
ニコ動に上がっていた動画の影響を受けついやってしまいました。
文才はあまりないので駄文かとは思いますが、やりたくてやったので、見てくれる方は見てください。
プロローグなので短いです。
（あと、太一が主人公なので、健二と佐久間は残念ながら出てきません。）

プロローグ

『――ようこそ。「OZ」の世界へ。
「OZ」は世界中の人々が集い、楽しむことができるインターネット上の仮想世界です。
アクセスはお持ちのパソコン、携帯電話、テレビ・・・等から――簡単に行え―・・・・ます。
・・・―デは、こ・・・レカ―ら「OZ」の・・・・―0101010・・・世界ヲ体験しテミま・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・オモシロイオモチャ、ミーツケタ。ネェ、ニンゲン。ボクトイッショニ、アソボ?・・・・・』

ネットワークシステム、「OZ」が発達しているこの世界。
あるニンゲンが、様々な情報を得て進化してゆく、『AI(人工知

能）搭載ハッキング用アバター、ラブ・マシーン』を世に放った。
だが、それは所詮、世界を崩壊させんとする『悪魔（ディアボロス）のゲーム』の始まりに過ぎなかった。

このお話は、一人の少年とその大切な者達による、『一夏の戦争ゲーム（サマーウォーゲーム）』という名の新たな冒険の記録である・・・

～デジモンアドベンチャー　ＣＨＩＬＤＲＥＮ，Ｓ　ＳＵＭＭＥＲ　ＷＡＲＧＡＭＥ～

第一話　ある夏の日の出会い（前書き）

更新が遅くて本当にスミマセン。

第一話　ある夏の日の出会い

インターネット上にある仮想世界、『ＯＺ』。
その利用者数は携帯電話の普及率と同じといわれ、世界中のユーザーが「アバター」と呼ばれる自分の分身を使って、様々な生活をしている。
ゲームやショッピング、ビジネスから各種公的手続きまで、あるゆることを実体験することができる。
数多の企業が支店を持ち、世界情勢をも動かしている。

『それが、世界最大規模を誇るコミュニティツール、ＯＺ――』

「・・・んなこと、言われたってなあ～・・・」

自転車に跨り、信号が変わるのを待っていると、「ＯＺ」の宣伝が聞こえてきた。
「ＯＺ」が世界中に普及し始めてから、早数年・・・世の中は「ＯＺ」のことばかりだ。
そして・・・それはこの少年にとって、非常に面白くないことだった。

「・・・だって、俺・・・パソコンとか携帯とか、苦手なんだよなぁ・・・」

そう呟いて、ガックリとうなだれる。

この少年こそ、人間界、そしてもう一つの世界・デジタルワールドを救った「選ばれし子ども達」の一人、八神太一。
デジタルワールドにて、パートナーであるデジモン達と共に、幾多の危機を乗り越えてきた。

だが、彼は高校二年生になった今でも、それら以外の「デジタル」なものが苦手なのだ。
パソコンもインターネットで調べ物をちょっとするだけ。携帯は電話機能だけを使用している。メールなどほとんどしない（するときは大抵、妹に助けを求める）。

しかも、太一は今だにパソコンは叩けば直ると思っている。

『太一！！信号変わったよ！！』

「・・・ぅおっ！？おう。サンキュな、アグモン」

どこからか声が聞こえ、太一はその声に礼を言うと自転車のペダルを漕ぎ始めた。

さて、今の声の主・アグモンが何処にいるのかというと、それは彼のズボンのポケットの中にある「デジヴァイス」の中である。
以前は、デジモンを中に入れることなど不可能だったデジヴァイスであるが、太一達やデジモン達の願いを受け、機能が変化した。

と、言うのも、デジモンを町に連れ出す際、どうしても彼らは目立ってしまう。デジモン達はできることならパートナーと一緒にいたいと考えているのだ。

『ねぇ、太一。今日は何で学校に行くの？』

「ん？いや、ちょっと光子郎に会いにな」

『どうして？どうして学校なの？だって今日、学校休みでしょ？』

今は夏休み。7月の終りである。

「どうせ、物理部の活動でもしてるさ。部員一名でよくやるよ・・・」

ちなみに、何故物理部が存続しているかというと、幽霊部員ならたくさんいるからである。太一も一応その中の一人だ。何故なら、幽霊部員とは選ばれし子ども達メンバーだからである。

「ったく、何が面白いやら、全く分かんねぇーな」

たまに太一が部室に顔出したときは、大抵パソコンをカチカチいわせていた。

『それで太一？光子郎に何のようなの？』

「ああ。ちょっと・・・バイトについてアドバイスを、な」

母親と妹・ヒカリに「バイトでもしなさい！！」と言われたのはつい15分前のこと。

7月も終りということで、サッカー部の練習はなく、太一はいつも家でごろごろしていた。
二人はその様子に我慢できず、太一に言ったのだ。
だが、太一はバイトなどしたこともなく、どういうものが自分に合っているのかすら分からない。
太一は光子郎に助けを求めるべく、逃げるように家から飛び出した。

『太一。バイトってなんだ？』

「んー？そうだな・・・自分で働いて、お金をもらう・・・仕事みたいなもんだな」

『ふーん・・・なんかつまんないや』

「ははは・・・まあ、確かに」

確かに。光子郎がいまやっているバイト、「ＯＺのシステム保守点検」は絶対に面白くない。
人選間違えたかな・・・太一はそう思った。

「・・・よし。ついたぞアグモン」

『外にでてもいい？』

「だめーーっ」

『太一のケチっ！！』

太一はその言葉に笑みを浮かべながら、自転車を駐輪場に止めた。

夏の暑い日差しが、彼を照らしていた。

「えー・・・っと、光子郎君はどっこかなー」

現在、太一は少し迷子になっていた。

『太一ぃ。そのブツリブ行ったことあるんでしょ？』

「あ・・・いや、いつもは丈と一緒に来てたから・・・」

ちなみに城戸丈は大学入試に向けての模擬試験に行っている。

「（あいつ・・・どこの大学行く気なんだ？）・・・おっと、たぶんこっち・・・」

廊下をジグザグ移動し、階段を上り下り・・・２０分かけて、ようやく目的地に到着した。

「はぁ・・・はぁ・・・やっと、着いた・・・・・・・」

『太一ったら情けないなぁー』

「うるせー。ほら、入るぞ・・・」

太一はドアノブに手を伸ばし・・・

バンッ！！！

「光子郎ー！！！ちょっと聞きたいことがあん・・だ・・・けど？」

太一は勢いよくドアを開けた。が、そこに光子郎は居なかった。代わりに居たのは、黒髪で長髪の綺麗な女の子一人。太一が勢いよくドアを開けたため、かなり驚いている様子だ。

「あ・・・えと。俺、光子郎に用があって来たんだけど・・・知らねーかな？」

「え・・・？あの・・・ゴメン。私が来たときには誰もいなくて、光・・・子郎君？が誰かも分からないんだ」

そう言って、女の子は頭を下げた。

太一は知らないようだが、彼女は篠原夏希。武家の血筋らしく、この学校のアイドル的存在（本人は気が付いていない）である。

「そんなことで頭下げるなよっ！・・・とにかく、光子郎がいないってことは分かったんだ。アリガトな」

いつもなら、この時間にはもう来ているはず。が、夏希が見ていないのであれば、今日は来てないのだろう。

「じゃ、さっさと出ようぜ？部室の鍵開けっ放しってのもマズイしさ」

「あ、うん。ゴメンね？」

夏希はそそくさと部室から出る。そして、太一が鍵を閉めるのを健気に待っていた。

「あ、鍵は私が職員室に持っていくから！」

「いや、いいって。これくらい何ともないさ」

「じゃ・・・じゃあ、私も一緒に行く！私、どうせ今日暇だから」

「ん？・・・ああ、いいよ。よく考えたら、俺ここからどう職員室に行ったらいいか、分かんなくてさ」

どうしてもと言う、夏希に疑問を感じた太一だったが、また迷うのもあれなので了承した。

そして、夏希の方はと言うと・・・

（よし！次はこの人にお願いしてみよう・・・）

と、何やら考えているようだった。

「って・・・意外に近かったんだな」

職員室は本当にすぐ近くにあった。太一は少し自分が情けなくなる。

「はぁ・・・せっかく光子郎にアドバイスをもらおうと思ったのに・・・」

再びガックリとうなだれる太一。その様子が気になった夏希は、

「どうしたの？アドバイスってなんの？」

と訪ねた。

「いや・・たいしたことじゃねぇんだけど、何か俺に合うバイトねーかなぁーって」

その言葉を聞いたとたん、夏希の目が煌めいた。

夏希はガシッ！と太一の手を掴む。

そして、

「バイト、しない！？」

と言った。

「・・・・・は？」

後に太一は語る。

不覚にも、ドキッとしてしまった――と。

だが、これが。この出会いが。

「サマーウォーゲーム」の始まりだった。

――無限大な夢のあとの　何もない世の中じゃ

そうさ愛しい　思いも負けそうになるけど

Ｓｔａｙしがちなイメージだらけの　頼りない翼でも

きっと飛べるさ　Ｏｎ　Ｍｙ　Ｌｏｖｅ　――

第二話　八神太一の小旅行（前書き）

更新が遅くなってしまってすみません。
パソコンが完全にダメになってしまったので、思い切って買いなおしました。

とりあえず、週一くらいのペースで投稿したいと思います。

第二話　八神太一の小旅行

『あはは。ごめんなさい、太一さん。僕、昨日から親戚の家に行ってるんですよ』

「なるほど、ね。そりゃあ、物理部行っても居ないわけだ。確認しとけばよかったよ」

特にすることもなく、家に帰った太一は自分の部屋で光四郎に電話した。まだ昼前のため、母親の掃除機をかける音がうるさくて、太一はベランダに向かう。

「…ったく。結局、無駄足かよ」

『あれ？篠原さんに会ったって、さっき言ってたじゃないですか』

「…ああ。そういやそうだったな」

ふと、今日会った女の子のことを思い出す太一。顔とかはハッキリと思い出せなかった。

しかし、会話だけはしっかりと覚えている。

――バイト、しない？――

『で。あっさりやるって言ってしまったんですね？どんな内容かも

聞かずに…』

「あ、いや、でもさ？その子と田舎に４日間旅行に行くだけだぜ？これほどいいバイトほかにねえだろ？…まあ、深く考えてなかったのは認めるけど」

これが高校二年生の考えることだろうか。どうやら太一は「旅行したらいい」。ただそれだけしか考えていないらしい。

光四郎は深くため息をついた。これでも太一は光四郎の１つ先輩なのだ。

『早く言ってくれれば、僕がいいバイトを紹介してあげたんですけどね』

「どんな？」

『ＯＺのシス…「却下だっ！！」』

予想どうりの答えが帰ってきそうだったので、太一は光四郎が言い終わる前に否定した。

『冗談ですよ。…まあ、太一さんなら大丈夫でしょう』

「ん？なにが？」

『その旅行、アグモンも一緒に連れて行くんですか？』

「あ、ああ。バレたらいろいろ面倒だからデジヴァイスに入ってもらうけどな。ほら、女の子ってトカゲとか苦手だろうし」

後ろのほうから、「僕はトカゲじゃないよ！！」という声が聞こえた気がした。

『ははは。そういうことじゃないんですけどね。ゲンナイさんがデジタルゲートの点検を近いうちに行うようなんです。その間、デジタルワールドには行き来することができなくなってしまうので…』

そういえば、と太一は思い出す。我が家のもう一人の居候、可愛いテイルモンを今日見ていないことに気がついた。
どうりで、今朝は顔を引っ掻かれなかったわけだ。いつもは彼女（？）が太一を起こしてくれている。

「じゃあ、テイルモンが居ないのは…」

『ええ。ゲンナイさんのお手伝いに。みなさんのデジモン達も皆。僕のテントモンなんか張り切っちゃって』

「ふ～ん…（やっぱりずっと一緒にいると性格が似てくんのかな？）アグモンは行かなくていいのか？」

『…ええ。来なくていいそうです』

「あはは。そりゃひでぇな」

たしかに。アグモンにはそういう作業は似合わない。

『それで、その旅行へはいつ？』

「２９日、木曜日だ」

『29…じゃあ、三日後ですか。…そういえば、大輔君やヒカリさん達が丁度そのあたりにアメリカへ旅行に行くんでしたよね』

「あー、ウォレスだかなんだか、変な男に会いに行くってな。…ったく、兄ちゃんは悲しい！！」

『はいはい。あんまり過保護すぎると、シスコンだなんて言われますよ？』

ちなみに、太一はもう十分シスコンであるが、そこは光四郎の優しさと言うことで。

「はぁ～…ま、とりあえずそういうことだから。長くなって悪かったな」

『いえ、楽しかったです。旅行、楽しんでくださいね』

「おう。お前も親戚の家でゆっくりしろよ。じゃあな」

ピッ！

ずいぶんと長く喋ったようだ。電話代かかるな、などと思いながら太一は母親に今日の昼は何か、聞きに行くのだった。

そして、当日。

夏希は東京駅で、太一が来るのを待っていた。かなりラフな格好だ。

彼女の足元には、大きなバッグ（おそらく着替え等）と、そのほかにお面やウクレレ、花火や様々な道具が入った紙袋が八つ」ほどあった。夏希が1人でこの量を持ってきたのかと思うと、正直ゾッとする。誰か手伝ってくれた人間がいたことを願いたい。

と、そこへ遅れて我らが太一がやってきた。

「す…スマン！連れがなかなか起きなく…」

「連れ？」

「だあーーー！！いや、なんでもない！本当に！今のは言葉の綾ってやつだ」

「そう？じゃあ行こっか」

夏希はにっこりと笑って言った。

太一は夏希があまり深く聞いてこないことに感謝した。もちろん、連れとはアグモンのことである。

「って、荷物多いな。持とうか？」

「あ、うん。ありがと。そういう太一君は荷物少ないんだね」
太一は肩からポストンバッグをさげているだけ。そして…
「サッカー…ボール？」
太一はサッカーボールを持ってきていたのだ。おもわず口に出してしまう夏希。
「ん。ああ、俺も最初どうかと思ったんだけど、なんか持って行きたくなってさ」
と言って、太一は微笑んだ。
「んじゃ、荷物は俺が持つから、夏希は案内頼む」
「…え！？…あ、うん。まかせて！」
太一の微笑みに軽く見惚れてしまった夏希は、一瞬反応できなかった。それにしても…
（いきなり呼び捨てって…たしか太一君、高校二年生で私より年下だよね？）
太一をこのバイトに誘い、彼の名が八神太一と知り夏希はなんとなく興味があって、少しだけ太一のことを調べてみた。
剣道部の部員に聞いてみると実はけっこう有名人だった。
サッカー部のエースで、運動神経抜群。勉強は苦手。

ひそかにファンクラブまで存在し、現在バンド活動で人気絶頂の石田ヤマトと親友。
…あと、彼女はいないらしい。

夏希は太一のことを知らなかったので、有名人と知って結構驚いた。
なにせ、剣道部で彼を知らないのは夏希だけだったから。

どうやら、こういう男女の話題には太一と同様に疎いようだ。

（ま、いっか）

夏希はそれ以上考えるのをやめた。もともと、敬語とか好きじゃないし、呼び捨てもそんなに悪いものじゃない。親戚以外の男の子に名前で呼ばれるのは初めてだったけれど。

「じゃあ、私の後ろについてきて。迷子にならないようにね？」

「うぐっ！！」

学校での出来事を思い出し、太一は顔をしかめる。

そんな太一を見て、夏希はクスクスと笑った。

「で？旅行ってどこへ行くんだ？」

「長野県の上田市って所。知ってる？」

「いや、全く」

そもそも、太一は長野県がどんな県かすら分かっていない。
重たい荷物を抱えて夏希の後ろをしばらく歩いていると、新幹線が止まっているのが見えた。どうやらあれに乗るらしい。
「そこに大おばあちゃんが住んでるの。八月二日におばあちゃんのお誕生会があって、あちこちから親戚一同が集まるの。でも、人手が足りなくて」
「へー…じゃあ、俺は夏希の親戚の手伝いとかすればいいんだな？」
そんなに苦なバイト内容ではないようで、太一は内心ホッとした。これなら俺でもできそうだ、と。
「え…うん。そんな所…かな？」
「ん？」
夏希がぎこちない笑みを浮かべたので、太一は疑問に思ったが深く考えなかった。
そんなわけで、太一と夏希が乗った新幹線は出発した。
が、
「ああっ！！」
「え？どうしたの？」

「…いや、ちょっと忘れ物を思い出して」

「忘れ物？」

（アグモンの分の昼飯、買うの忘れた）

どうやら今日は、デジヴァイスの中でアグモンはお腹を空かせることになりそうだ…

第三話　夢で会えたら（前書き）

何か出したくなって、彼を出してしまいました。たぶん、また出すと思います。

あと、短くてごめんなさい。

第三話　夢で会えたら

太一と夏希を乗せた「あさま５２１号」は野を超え山を越え、目的地に向かっていた。
窓の外を眺めてみれば、緑あふれる風景があっという間に後ろへ流れていく。
そんな様子を眺めながら、太一は昼食を取ることにした。
「いやー、俺ってどこか遠くに旅行に行くなんてこと、ほとんど無かったからさ。すげー楽しみだな」
弁当のおかずを口に運びながら、太一は言った。
「そうなの？家族でどこかに出かけたりしないんだ」
「ん、ああ。うちの親、結構忙しくてさ。なかなか大きな休みが取れないんだよ。まあ、それはよく分かってたから、俺達は何も文句は言わなかったんだけど…」
「俺…達？」
「あ、言ってなかったな。俺にはヒカリっていう妹がいるんだ。今、友達とアメリカ行ってんだけどさ」
「へぇー…妹さんがいるんだ」

「夏希は？兄妹とかいるのか？」

口に箸を銜え、むぐむぐ言わせながら太一は尋ねた。

「ううん。私は一人っ子なの。あ、でも、親戚の家には私より年下の子が何人かいて、その子たちが私の弟や妹みたいな感じ…かな？」

親戚の子たちを思い出したのか、夏希はクスッと微笑んだ。

「そっか。後で会えたら一緒に遊んでやるか」

そう言って、太一はまた弁当のおかずを口に入れた。

しばしの沈黙。その沈黙に耐えられなくて、今度は夏希から話題をふった。

「そ…そういえばさ。太一君ってサッカー部だよね？誘った私が言うのも何なんだけど、練習とかいいの？」

「むが？」と太一は口に物が入ってる状態で返事する。そして急いでお茶で流し込んだ。

「ぷはーっ！！…ああ、ごめん。部活だったら休みだから、心配すんな。まあ、部長の俺としてはもう少し練習を入れたかったんだけど、…ほかの連中がなぁ」

サッカー大好き太一は、夏休み中も、それこそ毎日のように練習を入れてもよかった。

だが、ほかの部員たちは、バイトがあるだの彼女がいるだので休みをくれと言ってきたのだ。

結果、夏休み中太一はかなり暇を持て余すことになってしまったのだった。

それを思い出し、太一はため息をついく。と、同時に、太一はあることを思った。

「なあ？夏希は何か部活やってるのか？…あ、でも3年だからもう引退したか」

その言葉に、夏希は少しだけ驚いた。

以前、友人に聞いた話によると、自分のことを知らない男はこの高校にはいないと言われた。

そんな大げさなと夏希は思っていたのだが、実際彼女は事あるごとに男子生徒達に告白されてきた。すべて断ったが。

また夏希は生徒会長を務めている。だから最近、友人の言葉に「そうなのかな？」と少しだけ思うようになってしまった。

だが、目の前にいる少年は、自分のことを全く知らないらしい。

（…なんだ。私のこと知らない人もいるじゃない）

夏希は少し嬉しいような、悲しいような、複雑な思いだった。

「うん。あのね…」

でも、太一には自分のことを知ってもらいたい…

そんな気がして、夏希は自分のことについて話し出した。

――気がつけばそこには、何もなかった。

何一つない、真っ白な世界。自分ひとり、ただぽつんと立っているだけの…そんな世界。

ここは…どこだ？俺は、どうしてここにいるんだ？

さっきまで、俺は新幹線の中で夏希と話をしていた。
自分が剣道部で主将をしていたこと。生徒会長もしていること。さらに、学校で起こった面白いこと。
その眩しいくらいの笑顔で話す彼女に、俺は自分のこと、友達のことを話していた。

すごく、楽しかった。

「けど、今はだれも居ない」

さっきまでのことが、まるで夢だったかのように静かだった。
音も何もない静寂な世界。

宇宙でも、真っ暗で音もないらしいけど、星の光はある。でもこの場所には光も闇もなかった。
ただ、真っ白な世界。

しばらくそこに立っていたら、目の前に小さな黒い点が現れた。
ほんの数ミリの小さな黒い点。でもそれはどんどん大きくなっていった。
どんどん大きくなって、ついには俺くらいの大きさになってしまった。

俺は走った。本能が告げる。あれはヤバイと。
けど、走っても走ってもそいつに追いつかれる。まるで、ピタッとくっついているかのよう。
どれだけ走ったかわからなくなって、俺は足を止めた。そして、ふと振り返ってみた。

黒い点は、いつの間にか異形の生物の形をしていた。どこかで見たことのあるような気がする。
俺はポケットに手を入れた。が、デジヴァイスはなかった。

こんな時、どうすればいい？
目の前のソイツは大きく腕を振り上げる。ソイツは大きく裂けた口を歪ませ、ニヤリと笑った。

逃げても追いつかれるだろう。だが、今の俺に助けてくれる相棒はいない。

なら。

「うぉおおおおお！！！」

俺は拳に力を入れて、思いっきり殴った。力いっぱい殴った。もう無我夢中で、目の前の敵をただ倒すことだけを考えて…

そしたらソイツは苦しみだして、消えてしまった。

…何が何だか分からない。

と、今度は目の前に青い光が現れた。今度は逃げようとは思わなかった。

それはどんどん強い光を放って、一体のデジモンになった。

見たこともない。でも、どこか懐かしい…

『よく、たった一人で立ち向かったね。さすが太一だ』

そのデジモンは言った。

『今のは【デーモン】の残留思念体。太一に恐怖と闇を植え付けようとしたんだ』

デーモン…確か、3年前にも現れたような気が…

『僕はそれを追ってきたんだけど…やっぱり太一は大丈夫だったね』

なあ？お前は誰だ？何で俺のことを知っているんだ？

『僕はパラレルワールドの住人。君とは別の世界に住んでいる。でも、僕は誰よりも君のことを知っているんだ』

…パラレルワールド。

『…気をつけて。太一が倒した敵が、新たな力を得て君の世界を壊そうとしている』

何だって！？俺が倒した敵ってなんだよ？

『そこまでは…でも太一なら絶対大丈夫だ』

何でそんなこと言えるんだよ。

『アハハ。それはね、太一が「１００％テイマー」だからだよ』

１００％テイマー？何だそりゃ？

『…さあ、太一。もう夢の世界は終わりだ。目を覚ます時間だよ』

夢？これは夢なのか…？

『そう。こっちの世界と太一の世界をつなぐ、夢という名の世界』

よく分からねぇよ。

『バカだなぁ、太一は。でも、それでこそ太一なのかも。誰よりも勇気があって、優しくて、でも物凄くバカで。…けど、そんな太一にみんなが惹かれるんだね。僕や君のパートナーのアグモンだって、太一のことが凄く大切なんだ』

そんな照れくさい言葉を残して、そのデジモンは足元から徐々に消えていく…

「おい、待ってくれよ！！お前の名前、まだ聞いてない！！」

そう俺は叫んだ。無性にアイツの名前が知りたかった。

そしたらアイツは笑って言った

『…僕はゼロまる。【アルフォース・ブイドラモン】のゼロまるだよ』

そっか。呼びにくいから「ゼロ」でいいな。

『！！…うん』

ゼロはもう首から上だけになってしまっていた。

なあ、また会おうぜ？今度はもっと、楽しい話しよう。

『ＯＫ、太一。…またね、もう一人の太一……』

そうして、ゼロは消えた。そして俺も…

「…はっ！！」

──気がつけば、そこは新幹線の中だった。

視線を横に向けると、夏希が気持ちよさそうに眠っている。口元は笑みを浮かべていて、よほどいい夢を見ているのだろう。

「…夢、だったのか」

太一は思いっきり伸びをした。座席で寝ていたので、少し体のあちこちが痛かった。

「…それにしても、さっきの夢は…？」

いつもなら、夢を見ても起きるとすぐに忘れてしまう。それは人間の脳の仕組み上、そうなっているとかなっていないとか。

だが、太一は今見た夢をハッキリ覚えていた。あのデジモンと何を

話したのかも、すべて。

「…ゼロ」

彼は言った。太一の倒した敵が、世界を壊そうとしていると。
でも、その敵が何なのか？そして、それがいつなのか？全く分からなかった。

「…まあ、難しいこと考えてても仕方ないか」

そう。今はバイトという名の旅行中なのだ。しかも、まだ何も始まってはいない。

とりあえず太一は、時間的にもうすぐ着きそうなので、夏希を起こすことにした。

上田駅はもうすぐだ。

ソレは、知りたかった。

この世のすべての知識を得たかった。そして、「進化」したかった。

だが、ソレは目の前の存在を理解することができなかった。

目の前にある、バグの塊。あらゆる情報のバグが集まって生まれた卵（デジタマ）。

ソレこと【ラブ・マシーン】は考えた。

これを吸収し、理解することができれば、より「進化」することができると。

ラブ・マシーンはそれに触れた。そしてそのデジタマを己に吸収した。

…よく分からなかった。だが、それが混乱を望んでいることは理解できた。人間世界の混乱を…

ラブ・マシーンは新たな情報を求めて、ネットの世界を彷徨い始めた。

しかし、そのハッキングＡＩは気づいていなかった。

自分が、そのデジタマに利用されているということに…

第四話　陣内家の主（前書き）

えらく更新に時間がかかってしまいすみません。なかなか時間が取れなくて。
相変わらずアグモンの出番が少ないですが、読んでいただけると嬉しいです。

第四話　陣内家の主

「す…すげー…」

東京から新幹線に乗り、在来線、市バスと乗り換え、さらに歩くこと計2時間以上の旅の末、太一を迎えたのは巨大な武家屋敷だった。いや、その広大な敷地はさることながら、その外観はまるで、歴史の教科書に出てくるような立派な日本家屋である。
太一はここまで背負ってきた大きな荷物の重みなど、すっかり忘れてしまった。

「ほら、太一君！早く早く！」

ボーっと屋敷を見上げる太一に夏希は声をかける。

「っ…！お、おお。今行く！」

夏希の声に太一は我に返り再び歩き出す。ふと見ると、屋敷の中に入るにはまだまだ坂を登らないといけないようで、ここまで来るときに合流した夏希の親戚たちは、すでに坂の上の方にいた。

「どう？驚いた？」

太一の顔をうかがいながら、夏希はニッコリと笑って尋ねる。

「ああ。こういうの見んの初めてだからな。なんか感動したよ」

「そか。わたしは小さい頃からおばあちゃん家に来るんだけど、それでも来るたびに見上げてしまうの」

さっきの太一君みたいに、と夏希は笑った。

（ネー…太一？いつになったら外に出してくれるの？もう、限界だよぅ～…）

（まだ駄目だって！…もう少しの辛抱だから）

（早くしてぇ～…）

夏希に屋敷を案内してもらっている最中、アグモンと太一はひそひそと会話していた。

新幹線を降りた際、アグモンにご飯を食べさせることをすっかり忘れていた太一が駅で駅弁３つほどを買い与えた（その際、夏希にはさっき食べたのにと不思議そうに見られたのだが）のが今から一時間ほど前。なんとか空腹状態は免れたものの、やはりデジヴァイス内は窮屈なようでアグモンは外に出たがっていた。

だが、いくらこの屋敷が広いとはいえ、夏希の親戚に見つかる可能性がある。本人は否定しているが、その容姿は巨大なトカゲ、パニックになるのは間違いないだろう。

できれば避けたい。何せ９０歳のおばあさんの誕生日の手伝いのため、バイトとしてここにきているのだから。

（アグモン見せて、ポックリ…なんて笑えない冗談は勘弁だしな…）

太一は一人苦笑いを浮かべ、夏希の後について歩く。

そして視界にに入ってきたのは大きな和室だった。何十畳、いやもしかしたら何百畳もあるかもしれない大きな和室。奥の壁には甲冑を始め、刀や弓矢などが飾られている。

「すげー…さすが武家屋敷」

やはり男の性なのか、甲冑を見て太一は素直にカッコイイと思った。

「やっぱあれ、昔ホントに使ってたやつなのか？」

「うん、そうみたい。現存してるのはあれくらいだけみたいだけど」

「へー…」

思わず触れてみたくなった太一だが、さすがにマズイと思いなおし、手をもどした。

「太一君。大おばあちゃんは書斎にいるって。挨拶しに行かないとね」

「…あ、ああ。そうだな」

さきほど、玄関にて夏希のおばさんである人、つまり今から会いに

行こうとしている大おばあちゃんの娘さん相手に「９０歳、おめでとうございます！」と言ってしまった、八神太一。

…正直、気まずい。

「…あのね、今頃になって言うのもアレなんだけど」

「は？」

申し訳なさそうな顔をして、夏希が振り向く。

「大おばあちゃんの前では、何を訊かれても、わたしに話を合わせてくれる？」

「話しを合わせる…？どういうことだ？」

（見ず知らずの他人である、俺の説明のことか？…いや、ただの手伝いでいいような気が…）

「いいから！とにかくそれ以上は何も言わないで！」

「お、おう…」

いろいろと頭に考えが浮かんでいたのだが、夏希の迫力の前に何も浮かばなくなってしまった太一は、力なくそう言った。

「大おばあちゃん。私、夏希です」

書斎の障子の前で夏希は声をかけた。

「お入り」

すると夏希の声に対し、ハッキリとした返答が返ってきた。それを聞き、夏希は障子をあけた。

「大おばあちゃん！」

「来たかい、夏希」

座っていたのは着物を着た老女だった。だが、確かに白髪で深い皺もあり高齢であるということは窺えるのだが、その目は違った。その声は違った。

（すげえ。ホントに９０歳のばあちゃんかよ…）

かつて、太一は石田ヤマトの祖母に会ったのだが、ふと思えば、あちらの方が若いはずなのにより高齢に思えた。

それほどまでに、力強い目と声だったのだ。おそらく若いころは相当な美人だったのであろう。

「逢いたかった！体の調子はどう？」

「見ての通りだよ」

「だって、最近元気がないって聞いて」

「ふふ…ただの夏バテだっただけだよ。最近は暑い日が続くからね」

「ホント？よかった！」

そう言って無邪気に笑う夏希。それを見て太一は本当に彼女が心配していたのだと思った。夏希の優しさを見たような気がして、少し微笑んでしまった。

「ん？お客さんかい？」

少し離れた所から二人の様子を眺めていた太一に気がつき、夏希に尋ねる。

夏希が手招きをしたので、太一は夏希の隣に座った。

「この人は、陣内栄（じんのうちさかえ）。わたしの大おばあちゃん」

「あ、どうも。…初めまして、八神太一です」

敬語は苦手な太一なのだが、この人には敬語を使わなければいけないと本能がつげ、自分でも驚くほどスラスラと言えた。

「初めまして」

「９０歳の誕生日、おめでとうございます」

そう言って、太一は少し頭を下げた。

「おやおや、ありがとう」

栄は微笑みながら礼を行った。

「夏希、この方が？」

「うん。約束通り、ちゃんと連れてきたからね」

太一は二人の会話を聞きながら長く下げていた頭をゆっくりと上げた。

しかし、あげた瞬間に耳にした夏希の言葉を、太一は理解することができなかった。

「わたしの彼氏」

「……は？」

夏希に顔を向けるとニコニコと笑っているだけ。栄は射抜くような視線で太一を凝視している。

「彼氏」

「そ。わたしのお婿さんになる人」

平然と言い切る夏希。太一は、一体いつ俺たちは彼氏彼女になったんだ！！と一瞬ツッコミたくなったが、この部屋に入る前に夏希が

言っていたことを思い出した。

『何を訊かれても、わたしに話を合わせてくれる？』

つまり、太一に彼氏役を演じろということだ。なんだかんだと勘の鋭いところもある太一は気付いた。

二人に見つめられながら、ほんの少しだけ冷静に考えることができた自分を褒めてやりたいと、太一は思った。

「太一さん」

「…はい」

栄の低く、しかし力強い声に太一は姿勢を正す。

「この子は世間知らずでワガママなところもあるけれど、本当に良い子なんだ」

柔らかな表情から一変し、厳しい表情で栄は太一を睨む。しかし太一は視線をそらすことはしない。真っ直ぐに栄の目を見る。

「ちゃんと幸せにしてくれるかい？」

「…幸せ」

チラッと夏希をみるとウインクしてきた。

「覚悟はあるかい、と訊いているんだ」

先ほどより大きな声で栄が言う。

（はあ…がらじゃねーんだけどな、こういうの…）

1人の女の子のために覚悟を決める。そんな経験を太一はしたことがなかった。もっとも、妹・ヒカリになら守ってやる！と大声で言える自信はあるのだが…

（そういや俺、結局空にも自分の気持ちちゃんと言ってないな）

かつて恋心を抱いた幼馴染。が、結局はその幼馴染の恋を後押しする形で終わった。きっと、どこか鈍感なところのある彼女は、自分が好きだったなんて気付いてもいないことだろう。

（そんな俺が、演技とはいえ女のために覚悟を見せる…なんてな）

「太一君？…大丈夫？」

何か考え込んでいる様子の太一を見て、不安そうに夏希が声をかける。が、返答はない。

（…けど、嘘ばかり並べてもあれだな。この人には絶対見抜かれるだろうし……よし）

長い沈黙を破り、太一はすぅ～っと息を吸い込み、

「ああ。覚悟はできてる」

と、言った。敬語ではなく、いつもの自分で。

「…本当に？命に代えても」

栄はまだ太一を睨みつけている。しかし、心の中でふっきれた太一は、フッと笑って言った。

「命には代えられないな」

「…何？」

「太一君！！」

予想外の言葉に、夏希があわてて太一を止めようとする、が、それを栄が制止した。

「…つまりそれは、そこまでの覚悟はないということかい？」

栄が静かにそう言った。

「いや、そうじゃない」

「「？」」

「確かに俺は、命に代えるつもりはない。夏希のために俺が死んだなら、夏希は自分のせいだと言って苦しみ続けることになる。俺はそんな思いを夏希にさせるつもりはない。だから…」

太一は栄の瞳を見据えてこう言い切った。

「俺は、絶対に死なない！夏希を助けるのなら二人一緒に生き残って見せる！！それならきっと、夏希が悲しむことはないだろうから」

「太一、くん…」

夏希はまさか太一がこんなことを言うとは思わずに、少し顔を赤くしている。

「はっはっは！！気に入ったよ！」

それまでの厳しい表情を崩し、笑いながら栄は言った。

「夏希。良い人を見つけたね。家の男共よりよっぽどいい男の人じゃないか」

「…あ、うん。ありがと」

「太一さん、どうぞひ孫をよろしくお願いします」

畳に手をついて深々と頭を下げる栄に、太一も、

「こちらこそ、よろしく」

そう言って、頭を下げたのだった。

「ごめんなさいっ！」

屋敷の裏に連れ出されるや否や、夏希が勢いよく頭を下げた。

「大おばあちゃんや親戚のまえで恋人のふりをしてほしいの！お誕生会が終わるまで！」

「…それが、バイトの内容か？」

「…うん。黙っててごめんなさい。本当の事言ったら、きっと来てくれないと思って…」

「あ、いや…」

（下心丸出しのやつだったら、喜んでいくんじゃねえのか？よく分かんねーけど…）

「まあ、言っちまった以上しょうがないしな。でも、いいのか？俺、女の子と付き合ったことなんかないんだけど」

「え？そうなの？」

意外…とでも言いたそうな夏希の顔を見て、太一は「はぁ…」とため息をついた。

「えーえー、すみませんね！この年で彼女いない歴、年齢と同じでな！！」

「ううん！違うの！！そうじゃなくて…」

少し拗ねた太一に弁解しようと、夏希は声をあげた。

「えと…太一君、そのかっこいいから、経験豊富なんだってわたし勝手に思い込んでた。…それに、わたしも男の子と付き合ったことなんかなくて、ホント言うと何をどうしたらいいか、どうすれば恋人に見えるのか分からないの」

「かっ…！！…いや、でもそれなら何でそんなに恋人役にこだわるんだ？」

そう。ずっと気になっていた。なぜ恋人役が必要なのか。

「だって、大おばあちゃんをがっかりさせたくないの！勢いで言っちゃったんだもん！」

と、必死の表情で夏希は太一の手を握る。

「お、おい…「大おばあちゃんは元気だって言うけど、最近具合が悪いって話しを聞いてたから。…私の彼氏、連れてくまで死んじゃダメ、って思わず約束しちゃって…」

「夏希…」

「…大おばあちゃん、わたしに彼氏ができるか、ずっと前から心配してたの。自分のせいだって気にしてるみたいで…」

太一の手を握る夏希の手に力が入る。少し、震えている。

太一は思った。彼女は本気なのだと。

「だから、安心させてあげたいの！大おばあちゃんに、いつまでも元気でいてほしいの！…お願い、わたしに協力してください！！」

そう言って、再び頭を下げる夏希。

「ったく…人の話し聞けよ。俺は断るなんて言ってないだろ？」

「！！太一君！」

バッと顔をあげ、その表情に笑顔が戻る。

「とりあえず、がんばってみるよ。…その、夏希の恋人役」

「やったあ！ありがとう！」

夏希がバンザイして喜ぶ。よほどうれしいのだろう。…恋人のフリだけど。

「それじゃあ、東大生で、旧家の出身で、アメリカ留学から帰ったばかりって事で」

「…なにが？」

「恋人・太一君の設定！」

「……」

さきほどまでの、あの泣きそうな表情は何だったのか、満面の笑みで夏希は答えた。

（ははは…女って怖えー…）

苦笑いを浮かべながら、太一はしみじみ思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5502k/

デジモンアドベンチャー　～ＣＨＩＬＤＥＲＥＮ’Ｓ ＳＵＭＭＥＲ ＷＡＲＧ

2010年10月11日02時18分発行